

こびもの詩コンクール応募作品資料

《小学校中学年》

最強の母

一新小学校

三年 徳尾 圭之輔

「きらいだなんて思っているでしょう。」

ドキッ

ぼくのきらいな野さいを

お母さんはズバリ言い当てた

ぼくの心の中を見通せるのだろうか

「何でわかるの。」

と聞いたらお母さんは

くすっとわらい

「八年もいっしょにいるからお見通しよ。」

と言った

あれ

ぼくも八年間

お母さんといっしょにいるよ

でも

ぼくはお母さんの心の中は見通せないなあ

ぼくの心の中を見通せる

お母さんには

かなわない

最強の母だ

(第三十五回入賞作品)

お母さんのひみつの時間

豊野小学校

三年 山本 惺空

夜中 目が さめた

ガラスばりのところから

明かりが もれていた

カチャ カチャ

「バーチャン、

アイスコーヒー出してくれん。」

お母さんの声だ

ぼくは ひっそり

足音を立てずに聞いていた

ばあちゃんとお母さんが

小さい声で話していた

おいしそうにわらって

アイスコーヒーをのんでいた

「なんでこっそりのんでいるのかな。」

ずるいな

と思ったけど

ばあちゃんとお母さんが

あんまり楽しそうだったから

だまって ねることにした

お母さんは

(第三十三回入賞作品)

ぼくを一生けんめい育てているから

これくらい

楽しみがなくなっちゃね

(第三十四回入賞作品)

ママのいろいろな顔

城東小学校

三年 佐土原 葉瑠

わたしがやくそくやぶったら

ママおこった顔

しゅくだいぜんぶおわったら

ママわらった顔

しゅくだいをおしえるとき

ママなやみ顔

ほかにも

ママがんびり顔

ママかなし顔

ママねぶそく顔

ママは

いろいろな顔がいっぱいある

そんなママがすき

(第三十三回入賞作品)

ぼくの大好きな時間

南ヶ丘小学校

三年 春日 伸仁

五時三十分

ぼくはそわそわする

家をたんけんしたり

テレビを見たりする

五時三十五分

だんだんぼくはえがおになる

すこしとびはねながら

まどの外をみる

五時四十分

ガチャ

やっとお母さんが帰ってきた

「ただいま」

「おかえり」

心がぼかぼか

あたたかくなる

ぼくの大好きな時間

(第三十一回入賞作品)

お父さんの仕事

菊水小学校

四年 田中 駿太郎

お父さんは消防士だ
朝七時に出ていく
小学校と同じくらい
一週間に四日
消防署に行く
夜でもぐっすりねむれない
消防服を着て
決まった場所
いつもねている
サイレンがなると
すぐに起き
一分くらいで出勤する
だからいつも
帰ってくるかねている
ぼくが音をたてると
起こしてしまっ
お父さんの仕事は
命を守る仕事だ
お父さんが
ねぶそくになると
出勤できなくなる
だからおとうさんのために
起こさないようにしたいな

ぎゅっとする

三玉小学校

四年 松島 美羽

朝
「いってきます。」
とわたし
いつもお母さんが
笑顔でぎゅっとしてくれる
「今日も一日 がんばるぞー!」
元氣スイッチが入る
夕方
「ただいま。」
とお母さん
顔は笑顔だけど
ふっつとため息
今度は私が笑顔で
ぎゅっとしてよう
おフロもあらっておとうかな

(第三十五回入賞作品)

どうしてだろう

託麻南小学校

四年 安永 れい

お父さんのたん生日
毎年あげる
プレゼント
いつまでも
ずっとずっと
車の中で
ほかんしている
わたしは
車にのるたんび
おりがみや
プラバンを見る
きず一つついていない
たいせつにしてくれている
しるし
どうしてすてないのだろう
わたしは
プレゼントを見るたんび
まどのそとを見て
なきそつになる

(第三十三回入賞作品)

ママがんばったね

武蔵ヶ丘北小学校

四年 桑原 瑛舞

雪のふる寒い日
パパとママは病院へ行ったね
夜になってパパは一人で帰ってきたよ
「ママは点できしているから病院に泊まるよ。」
パパは入院と言わなかった
でも入院と分かったよ
その日から
おじいちゃん おばあちゃん お姉ちゃんと
四人ぐらしが始まったよ
ママは次の日も次の日も帰らない
そして次の日も帰らない
暗い寒い日も学校は休まなかったよ
ママは点できをがんばっているから
今まで仕事や家のことをがんばりすぎたから
節分の日恵方まきを食べたよ
方がくはちがうけど
ママの病院の方を向いて食べたよ
だまってたくさん願って食べたよ
パパが帰ってきてみんなで豆まきもしたよ
「発表します。」
明日三人でママを迎えにいくよ。」
退院だ 退院だ
ママががんばってくれてありがとう

(第三十五回入賞作品)

(第三十六回入賞作品)